

## Try &amp; Try

## 一歩ふみだした人たち

男女の性別にこだわらず自分流の生き方をみつけた人たちは  
私たちにどんなメッセージを送っているのでしょうか。

## 夢は世界へ

## 造園技術を身につけて

浜松市

八木 篤子 さん

浜松市初生町にある県立技術開発専門校。ここは、離転職者を対象とした職業訓練を行う所で、機械科、溶接科、電気工事科、広告デザイン科、コンピュータ事務科、木工科と並んで造園科があり、定員十五名中、女性が二人、その一人が八木篤子さん、二十六才です。

縁に囲まれた初生町の広い校内は、風が渡り、気持の良い所でしたが、この夏最高の暑さというこの日、造園科のみなさんは、炎天下で四ツ目垣、金閣寺垣の作り方に取り組んでいました。

二、三人が組になって仕上げた美しい垣根が幾つも並ぶ庭で、首に手ぬぐい、腰には木鋏、枝切り鋏、剪定鋏の一式を下げた八木さんは、すっかり日焼けして、たくましい。

「鋏を持ってまだ二カ月です」と遠慮がちな八木さんでしたが、「技術を身につけたいと思って選んだ造園の仕事は、何をしてもしっかり。学ぶことがたくさんあります。」

す。」と、東京の出版社をやめてきただけに、どんなことでも可能にしたい。そう、若さにあふれていました。

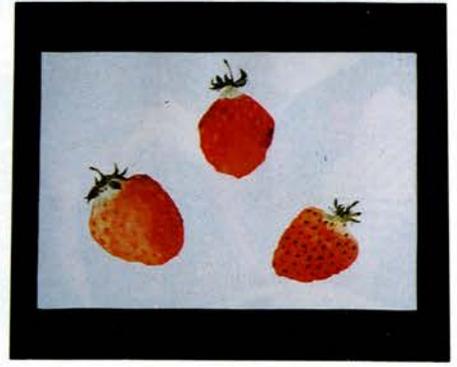
ここでの勉強が終わって、社会に出てから、迷いや後悔が出てくるかも知れないが、それでも、やらないことを悔いるよりはやってみたい方がいい、と言う精神の持ち主。造園は、力仕事でもあり、高い所へ登ったりもする男の仕事と思われていて、女を受け入れてくれないのなら、女性だけで会社を作ればいい。日本の国内だけにこだわらず、たとえばカナダに行けば仕事はあると思う。と、国際社会に目を向けた希望を持っています。

八木さんの家庭は、泥んこになって仕事をしている娘を黙って見守っていてくれるそうで、幼い時から、行儀以外は兄と差別されて育った記憶はないといいます。

八木さんは、やりたいことを決めるのは自分だと思っています。ただ、これからいろいろな仕事を选ぶ女性は必ず増えると思われているから、後から来る女性の妨げになるようなことをしてはいけなさと自戒しているそうです。

八木さんの夢は、カナダへ広がっています。結婚した方が





絵にやすらぎを

求めて

相良町  
横山 栄子 さん

横山栄子さんは、農家の主婦のかたわら二年ほど前から、独学で絵を描き始め、先日、個展を開きました。

「絵はだれでも描けますよ。」と気楽におっしゃる横山さんは、二年前、新聞の紹介で、なにげなく読んでみた松本きみ子著の「絵のかけない子は私の教師」に深く感動し、私にも描けるのではないかと、挑戦してみたのが始まりだそうです。制作時間は、もっぱら夜

と雨降り、自分で時間を作っては、描き続けています。

御主人からは、「そんなくだらん事、いつまでやっているんだ。」と言われるそうですが、個展の準備の時には、だまって絵の運搬をやって下さったという。やっぱり一番の理解者であり、協力者でもあるのではないかと思います。

個展を開いたきっかけは、自分の描いた絵をただ押し入れにしまっておくより、だれかに見てもらいたいと思ったからだそうですが、その後ポツリと話してくれた「今のままじゃ、一生終わりにたくないんです。自分は何の取り柄もないけれど、自分の存在をだれかに分かってもらいたいんです。何か、このままじゃ死ねないって気持ちになるんですよ。」との言葉に横山さんの内面からあふれてくる強いバイタリティーと、行動力を感じました。

個展にきてくれた方々のなかで一三八名の方がメッセージを寄せて下さり、その後手紙のやりとりもあるそうです。個展を開いてみて、全く別の世界が見えてきて今は前よりもっと楽しくなってきたそうです。

「絵を始める前、毎日憂うつだと思っ

や家庭のためにも良くなかったと思います。自分が楽しい事ややっていけば、少しくらいイヤな事があっても苦にならないし、絵を描いていると、イヤな事はすぐに忘れてしまいます。」と言う言葉に、心のやすらぎの場を、自分で発見できた女性を見る思いがしました。

何かに挑戦してみる時、心配と不安はつきものですが、とにかく第一歩を踏み出してみる/それからでないと、何も見えてこないんだなあと横山さんの話を伺って痛感しました。

二年くらいしたら、また個展という新しい目標に向かって、描き始めている横山さん。二年後がとても楽しみです。



七つの海へ

セールオン

国立清水海員学校  
外航課程 戸部 朋子 さん  
航海科 関口美穂子 さん

さわやかな潮の香のただよう朝、戸部さんの一日は起床放送で始まります。寮の当直の時は、午後十時二十分の巡検まで、授業・実習と分きざみのスケジュール。

実習で真黒に日焼けし、ひきしまった敏捷な動作で、生き生きとそれをこなす姿は、私達の持っている既成の「海の男」的イメージをカラッと打ちくだいてくれます。

清水市三保にある国立清水海員学校(市川明校長)ここは高卒者に対し一年間の船員教育を行う所ですが、今春、外国航路の船に乗組む船舶技士を養成する航海科に二人、調理師の資格が得られる司ちゅう事務科に六人もの女子学生が、全国で初めて誕生しました。

戸部さんは埼玉県三郷市出身、中学の時から航海士になりたいとの夢を実現する第一歩として、「女の仕事ではない。しかも不況の業界といわれているところに、なんで今さら」と反対する父親を半年かかって説得しての受験で



す。その陰には、小さい時から「これからの世の中、女としてやってはいけないことはないんだよ」と育ててくれた母親の強力なバックアップがあったようです。

短大を休学してまで自分の夢の実現にかけた関口さんは、高校の頃から船員にあこがれていましたが、海上保安庁三等航海士になった女性の記事を読んで「ああ女性にもなれるんだ」と、思いをさらに強くしたとか。このことは、女性にとって情報が非常に大切なことを教えてくれます。

二人の思いきって飛び込んだ夢の世界の現実は一——勉強が楽し

「おんなの姦し話から生まれました街。おせっかいにも、自分が良いと思う品を人にすすめたい町。人とのコミュニケーション待ち。」そんな「ま・ち」を訪ねました。松永さん所有のショールームを有効に利用しようと、八人の女性が集まって、各々の店を開いていま

街・町・待ち「ま・ち」

清水市

伊藤 智子さん・落合喜美枝さん  
佐藤 礼子さん・西貝 和子さん  
深田愛江子さん・松永 和子さん  
山下 冴子さん・山梨佐江子さん

くてたまらないと口を揃えて言う二人ですが、決定的に違うのが筋力、カッターやロープを扱う時に身にしみて感じたそうです。オールを持つ手はマメだらけ、トゲもいっぱいささって、全身筋肉痛、そんなつらさも好きなことができ、幸せに支えられて頑張れました。

構造不況の代表といわれる海運業界に彼女達を生かす道があるのでしょうか？今の予測は決して明るいものではありません。が、自分の夢の実現に帆をいっぱい張った彼女達に大きなエールを追い風として送りたいと思います。

す。

手作りの帽子とバッグを売る店、抹茶からポプリ人形、セーター、それにサラダソースまで並べている店、病気になる時の介護の品々、リースの車椅子を置く店などのほかに、一級建築士が無料で住まいのコンサルティングをしてくれるスペースもあります。

船船代理業や印刷会社などの経営者であったり、社長夫人であったりする八人の女性たちは、本当に「生きている」と感じさせる魅力を持っていました。

八人は各々の人生経験を生かして「ま・ち」を始めましたが、趣味ではなく商売として成り立たせるために、今難しい課題に取り組んでいます。月一回の定例会では、小さなことでもみんなて話し合い、問題を残さないようにしているほか、清掃や休日のこと、お客さんがたくさん来てくれるようにすることなどを考えています。

実際にやってみて、自分で選んだ品物が売れることの嬉しさと共に、仕入れの難しさ、売ることの難しさを知りました。

「清水をもっと元気な町



にしたい。」という願いも、彼女たちの「ま・ち」には込められており、始めてみて「やっぱり清水が好きなんだ」という愛郷心も再確認しました。自分たちのやりたいことを、自分たちの住む町の活性化に結び付けてしまおう発想に、社会で活躍してきた人たちのバイタリティを感じました。

「女性は社会に出ることによって、人間として生きることができるといって彼女たちの言葉は、とても印象深いものでした。私たちも、人間らしく生きていくために社会に踏み出していききたいもので

「女は家庭」のころ

私たちの身近にも、様々な方法で社会に踏み出し、のびのびと生きている女性がいることがわかりました。そして彼女たちは私たちに、性の違いで固定されない生き方が、いかに自由で人間らしいものであるかを教えてくれました。

男女共同参加型社会をめざしてより多くの女性が、生き生きと人間らしく暮らしていくためには、「男は仕事、女は家庭」というような、固定的性別役割分担意識の見直しが必要なのではないでしょうか。

そしてこれから… ゆるやかな変化を求めて

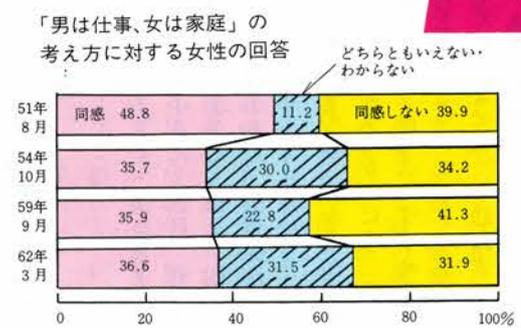
社会では

主婦症候群、キツチンドリンカー、妻たちの思秋期——このような言葉が世間にあふれています。「子供が生きがい」と思ってきた女性が、子育て後に陥りやすい現象とされています。ライフサイクルの変化により、長くなった人生をどう生きていくかが問われています。

主婦が働くとなると、多くの人が「パート」を選びます。それが本人にも、夫にも、そして企業にとっても都合が良いからという現実、問題はないでしょうか。

家庭では

ファミコンなどのゲームにしても、女性は常に助けられる弱い立場で登場し、男性はその女性を助けるナイト役を演じています。このように、何気なく子供に買いつけておもちやを通して、また「男の子は男らしく、女の子は女らしく」というしつけを通して、子供たちの自由な生き方を、知らないうちに阻んでいるのではないのでしょうか。



意識の改革を

働くにしても、地域活動等をするにしても、まず家事がしっかりできてからと、女性自身が考えているのではないのでしょうか。無意識のうちに多くの女性は、自分たちを「女は家庭」という役割に縛り付けてしまっているようです。

女性自身の意識が変わらないでどうして社会の通念や制度を変えていくことができるのでしょうか。また、どうしてより多くの女性の社会参加を進めていくことができるのでしょうか。女として、そして人間として伸びやかに生きていくために、私たちは今、自分たちの意識から変えていかなければならないのではないのでしょうか。

～読んでみませんか～

「主婦ブルース」  
目黒依子著 筑摩書房

「妻たちの思秋期」  
斉藤茂男著 共同通信社

両親の就労状況と高校生の家事分担

		女子			男子		
		いつもする	ときどきする	しない	いつもする	ときどきする	しない
食したく	共働き	18	60	22	3	39	58
	父のみ就労	6	60	34	1	31	68
あたとづけ	共働き	25	58	17	5	39	56
	父のみ就労	18	58	24	5	31	64

資料出所：中野区婦人問題担当「高校生の性別役割分業に関する意識と実態」



学校では

ある小学校で、「お母さんが食事の用意をしている時、お父さんは洗たくをしています。」という作文に、子供たちはみんなどっと笑いました。教科書の中で、女性はどうのように描かれているのでしょうか。

高校では、長い間家庭科が女子のみ必修になっていたことが、男子に、家事はしなくてもよいと思いが込められていたのではないのでしょうか。

